

「多様性」盛衰のうねりと言語問題について

片岡邦好

はじめに

本論考では、言語学における多様性と普遍性への憧憬が時を超えて再帰することを確認した上で、現代は多様性に向けて振子が傾く状況にあり、それが人文社会学との接点を持つ領域において顕著であることを述べる。その典型的な現れの1つとして、英語の世界的拡散を踏まえた近年の英語教育を取り上げる。端的には、「母語話者の英語」を規範としてきた英語教育観は今や見直しを迫られ、「多様な英語」の容認がさらなる英語変種の拡散をもたらすこと、それゆえに（少数）言語の多様性が脅かされるという二律背反の状態にあることを指摘する。

1 多様性と普遍性のうねり

本稿では「多様性」を「普遍性」に対置する概念として論を進める。一般的に普遍性に対置されるのは特殊性であるが、様々な特殊性を受容するところから多様性という発想が生まれることを鑑みれば、飛躍した想定ではあるまい。言語の多様性は、「バベルの塔」の寓話にある通り、人類共通の「問題」としてその苦悩が連綿と語られて来た。裏を返せば、ことば

の普遍性が問題解決の礎であり、言語学においても普遍的真理への憧憬は通奏低音として常にその根底に響いている。以下では、短絡のそしりを覚悟で、言語学におけるそのような多様性と普遍性のうねりを概観してみたい。¹

言語学は、例えば法学、哲学、神学といった古典的学問に比べれば後発の分野に当たるが、「言葉を効果的に使う」ことを探究する修辞学や劇作なども含めるなら、その起源は紀元前のギリシャ哲学（プラトンやエピクロス）にまで遡る。ただし一般的に、近代言語学誕生の契機は1786年のウィリアム・ジョーンズ卿（1746-1794）による王立アジア協会での講演にあると考えられている。ジョーンズ卿は法学者であったが、ヨーロッパ各地の法典を読み解くうちに、サンスクリット語、ギリシャ語、ラテン語、ケルト語、ゲルマン諸語が顕著な構造的類似性を持つことに気づき、共通の祖先から派生した可能性に言及することで、以後100年にわたる祖語探究の起点となった。その後19世紀には、ドイツのライプティヒにてヤーコプ・グリムらの青年文法家による比較言語学が興り、「印欧祖語（Proto-Indo-European）」という概念が形成されるに至った。

近代言語学が生まれた19世紀といえば、社会ダーウィニズムが西欧社会を席卷した時期である。ヒトの起源を辿る中で、人間と動物を隔てる基準として、ヒト言語の起源に関心が集まったことは当然といえる。しかし同時に、言語の起源につ

いて立証不能かつ不毛な議論が相次いだことで、パリ言語学協会は1866年にそのテーマに関する議論を禁止する決議を行い、このタブーは近年に至るまで影を落としてきた。

同時にヨーロッパでは、ヘルダー（1744-1803）やフンボルト（1767-1835）を中心とする19世紀のドイツ・ロマン主義において、民族固有の精神性や才気を「言語」に求めるという思潮が顕著となってきた（渡辺1973）。（この思想はヴァイスゲルバー（1899-1985）にも見られるとおり、連綿と現代にまで続く。）この点で、19世紀のドイツでは多様性が標榜された時代だといえるだろう。実はそのような発想は、第一次世界大戦で疲弊した民衆の愛国主義と結びつき、ナチズムの台頭を招いたという指摘もある。歪な論理にもとづく言語イデオロギーによって精神の多様性が特定民族の優越と結びつけられ、結果的に独裁と殺戮を招いたことは歴史の悲劇としか言いようがない。

また20世紀初頭のヨーロッパで、言語学（さらに社会科学）における画期的な思想となる「構造主義」が芽生えた。その提唱者、フェルディナン・ド・ソシュール（1857-1913）は、従来の「通時的な」方法に基づく比較言語学的手法に加え、非歴史的で静態的な言語の様態を扱う「共時的な」手法による言語の分析を提唱した。そして「シニフィアン」（例えば“ne ko”という日本語の音）と「シニフィエ」（“ne ko”という音が表す「猫」の概念）が、恣意的な結びつきからなる記号

操作の産物であることを喝破し、記号論の発展にも寄与した。このような「差異の体系」という概念は構造主義の根幹をなし、広く言語学（ヤコブソン）、人類学（レヴィ・ストロース）、言語哲学（バルト、クリステヴァ）などに強い影響を与えた（加賀野井 1995）。ただし、ソシュールの言語思想に「言語固有の世界像」という言語相対的な発想も垣間見られるものの、ヨーロッパにおける20世紀の言語学において言語相対性が表舞台に上がることはまれであった。

20世紀はアメリカの世紀と言われるが、アメリカ言語学の成立はヨーロッパとは事情が異なる。アメリカ言語学は人類学の一分野として、ネイティブ・アメリカン（俗称「アメリカン・インディアン」）言語をいかに記述して後世に残すかという目的から始まったという経緯がある。それを主導したのは、ドイツに学びアメリカに移住したフランツ・ボアズ（1858-1942）という人類学者であり、ドイツ・ロマン主義の薫陶を受けた彼の思想が、アメリカに言語相対主義を根付かせる原動力となった。それはその後、ボアズの弟子筋に当たるエドワード・サピア（1884-1939）とベンジャミン・リー・ウォーフ（1897-1941）の言説によって流布し、「サピア＝ウォーフの仮説」と称されるに至った。² 20世紀前半はいわゆる相対主義がそれなりに認知されていた時代であり、様々な議論を経ながらも1950年代までは相対性への関心がアメリカ言語学会に大きな影響力を及ぼした。³

ただし1950年代以降、認知主義に基づく普遍性を追求する時代が幕を開ける。サピアやウォーフの主張は科学的な検証を経たものではなかったため、彼らの死後、レネバーグ、バーリンとケイらの心理学者から、言語相対性の典型と考えられていた色彩語彙の「普遍性」を示す実験・調査結果が提示され、1960年代から1990年代の北アメリカにおいて言語普遍性の時代を迎えた。このような理性・認知主義に基づく普遍性の原動力となったのは、ノーム・チョムスキー（1928-）が提唱した「生成文法（Generative Grammar）」であり、その根幹にあったヒトの生物的普遍性への憧憬は当時のアメリカ言語学界を魅了した。

チョムスキーが反旗を翻したのは、それ以前に「心」の研究を牽引していた行動主義心理学（そしてそれを支持していたブルームフィールドの構造主義言語学）である。言語習得は心理・認知的プロセスであるため、当時の言語教育で主流であった「聴覚口頭教授法」の基礎は、ワトソンやスキナーらが標榜した「オペラント学習」（「刺激-反応」の強化が学習を促す）という理論に依拠していた。チョムスキーは、このような経験論的な言語習得観に強烈な異を唱え、「刺激に対する反応の強化」という発想では子供の言語習得は説明できないとして、「刺激の貧困（poverty of stimulus）」という概念を用いて反駁した。この主張の元となったのは、無限に発され、誤りを含んだ言語表現に晒されながらも、子供は模

倣によらずに母語話者としての言語能力を獲得するという事実である。それが可能となるためには、子供に内在する、言語の発現を促す言語能力が生得的に備わっているはずだと主張したのである。この主張は「生成文法」という普遍的モデルによって理論化され (Chomsky 1965)、理論主導型の多様な形式主義言語理論が 20 世紀後半のアメリカ言語学を席卷した。

ただし、この時代が普遍性一辺倒であったかという点、必ずしもそうではない。チョムスキーが主導した言語学は、コンピューターの働きを模した「計算主義 (Computationalism)」と呼ばれる発想に基づく。つまり、0 か 1 かの二項対立的な、数学的形式論に基づいて言語分析を行う方法である。しかし、コンピューターの発達に伴い、1980年代には認知科学において脳細胞のネットワークを模したコンピューターモデル (とくに「コネクショニズム (Connectionism) 」) が注目を集めるようになる。このモデルは、脳細胞の発達や情報伝達をコンピューター上の模擬ニューラルネットワークにて再現しようとするモデルである。それに呼応するように、コネクショニズム的発想や身体性が言語の発達や変化に影響すると考える「認知言語学」が1980年代に登場する。その主唱者の一人、ジョージ・レイコフは、言語固有のカテゴリー化やメタファー認識といった、言語相対的なメカニズムが構文や文法の発達に関わることを認めている (Lakoff 1990)。これらの対立軸

の出現により、「普遍文法」という思想は1990年代以降徐々に影響力を弱めていく。

また、1970年代以降の顕著な社会思想である「ポストモダン主義」は、言語学の周辺領域の発想を一新した。言語学が追及する体系的、普遍的な理論構築とは、ポストモダン主義が述べるところの「大きな物語」(Lyotard 1979)の具現化である。この「大きな物語」とは、主体的かつ理性的判断、整合的かつ網羅的体系性、還元可能な等質の要素、といった知性・理性・ロゴスにもとづく思惟を指す。ポストモダン主義は、このような構造主義・形式主義に対するに懐疑的な姿勢を明確に打ち出した。そこに通底する(過剰な)相対的思想は社会科学の諸分野においては大きな衝撃とともに受け入れられたものの、言語学(特に形式主義的な理論言語学)にはほとんど影響を与えなかった。ただし、人類学や社会学(また言語学では応用言語学や社会言語学)といった人文社会系の領域では(Marcus and Fisher 1986; Kramersch 1993)、ポストモダン的な分析のアプローチが徐々に浸透した。⁴

このような毀誉褒貶に晒されながら、言語の普遍性と相対性は各々がうねるようなかたちで、特定の時期に影響力を及ぼしながら再帰するという関係にある。そして現在の言語学的状況は、普遍性か多様性かの二者択一ではなく、具体的状況においてどちらが、どの程度の影響力を持つのかを、さまざまな検証方法を用いて見定める段階にあるといえよう(例

えば Levinson 2003)。

近年の言語研究全般を見渡すと、言語の多様性と相対性を前提とすることが人類の存続や社会生活上の権利保証にもつながるため、積極的に認知する方向へと向かっている。そこで以下の節では、(1)「言語」という概念そのものを問い直す手話のシステム、(2)言語の多様性の発露として、言語類型論から見た「語順」という現象、そして(3)英語拡散に伴うポストモダン後の英語教育理念について触れてみたい。これらを概観することで、形式論から経験論（そしてその発露としての言語相対性）に傾きつつある言語学の周辺領域に焦点を当てる。

2 言語の多様性と少数言語—手話について

まず、言語的多様性の現れの一つとして、手話に焦点を当ててみたい。もちろん手話も言語である。音声言語が言語分析の主流を占める中、手話の言語学的分析が始まったのは近年のことである（例えば Stokoe 1960）。ここで述べる手話とは、「日本語対応手話」（「手指日本語」とも）のように、「日本語」の文字に手形を対応させた人工的な手話ではない（それは「日本語」の変種である）。あくまで、聾者のコミュニティにおいて、自然発生的に生まれた「日本手話」などのことを指す。当然そこには個人差もあれば、方言や若者ことばもある。

実は手話にも「音素」があると聞くと、多くの人は首を傾げる。しかし、音声言語の「音素」に対応する要素を用いてコミュニケーションを行う点でまったく同じである。アメリカ手話（ASL: American Sign Language）、日本手話（JSL: Japanese Sign Language）、その他各国の手話でも、物理的な「音」は用いないが、表情や手形、その実施場所や動かし方にはそれぞれ「文法」があり、一定の規則にしたがって意思の疎通が行われている（これら一つ一つの要素を音声言語にならって「音素」(phoneme) と呼ぶ）。例えば英語の場合、/pen/ と /ten/ という音（この場合、綴りではなく発音記号に注目）は /p/ と /t/ という音の違いのみで区別されている。つまり /p/ と /t/ の違いが意味の違いを担っている。手話においても同様に、意味の違いを分ける要素は「音素」と呼ばれるが、手話の場合はさまざまな手の形、場所、方向性、動きといった要素がそれにあたる。⁵ これらの組み合わせによって、意味の単位である「形態素」が構成されるのである。具体例を見てみよう。

まず図1の(1)MOMと(2)DADを比べれば明らかなように、両者の手形、手の平の指す方向、そこに至る動きも同じであり、唯一の違いは親指が接する場所（顎か額か）のみである。意味的には、MOMとDADは直系、1世代差、直接の親、という点で等しく、両者の違いは女か男かという性差だけである。この対応関係からわかることは、「性」という意味的差

異があごか額かという「場所」の対立によって表されているということである。この差異は(3)SISTERと(4)BROTHERという複合的な手話語彙にも見て取ることができる。この事実から、アメリカ手話においては場所が性差の指標となり、意味を構成する「音素」として機能していることがわかるだろう。



図 1. アメリカ手話における音素 (<http://www.lifeprint.com/index.htm>)

別の例を見てみよう。図2のアメリカ手話の場合(1)と(2)は手の動きのみで対象物の区別がなされている。(1)は話し手と聞き手以外にも「私たち」に当たる対象がその場にいる場合、(2)は話し手と聞き手以外に「私たち」に含まれる人がその場にはいない場合である。つまり手話は、視覚による空間情報を

容易に取り込める（取り込む必要がある）ため、代名詞 we の使用に関してはアメリカ口語英語よりも明確で簡潔な指示が可能になる。つまり、口語英語では誰が「私たち」に該当するのかをことばを尽くして説明しなければならないが、手話ではこれが義務的かつ容易に行われるということである。



WE
(other referents present)



WE
(other referents not present)

- (1) その場にいる WE (2) その場にはいない WE

図2. アメリカ手話の WE (<http://www.lifeprint.com/index.htm>)

さらに、口語英語ではうまく表現できない “inclusive we” や “exclusive we” といった概念を、手の動かし方や指の数による対象の指定によって厳密に表示できる。⁶ 例えば図3では、その場にいる複数の指示対象である「私たち」の中から話し手と聞き手のみを適切に抽出している。口語英語の WE にはこのような区別はなく、アメリカ手話のような具体性を欠いている。もちろん口語英語の話者も、ジェスチャーや視線を用いれば同様の指示は可能だが、義務的でも

なければ（あくまで選択的）、規範的でもない（その形式は不定）。

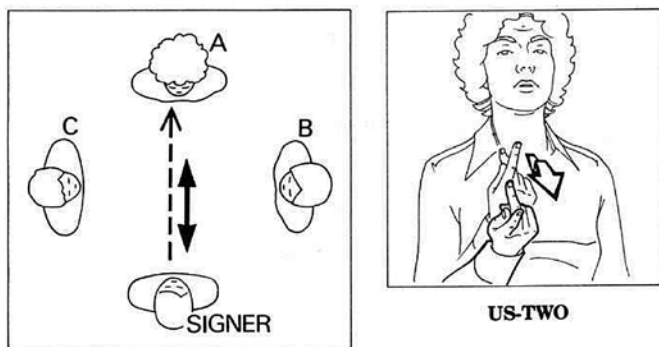


図3. アメリカ手話による“inclusive we”（話し手と聞き手をさす「私たち」）（同上）

以上のような、音声言語の限界を超えた用法が手話にはある。したがって、手話を言語の多様性の中に含めないとしたら、人間言語の境界も特殊性や普遍性も確認できない。特殊性と普遍性は車軸の両輪のようなものであり、片方が担保されなければ他方も実現できないという関係にあるといえよう。

3 言語の多様性と人間の認知—語順について

次に、言語の多様性が実は人類の存続に関わる可能性を指摘する。時に巷でも、世界に言語はいくつあるかということ

が話題になるが、言語の語順の分布を気にする人は少ないだろう。そこで本節では、言語数および語順の多様性と人類の生存との関連を考えてみたい。

まず、「言語学的な」分類によれば世界に言語は6000から7000存在するといわれている (Ethnologue : <https://www.ethnologue.com>)。往々にして、「言語」は政治的な産物である。「言語とは陸軍と海軍を持つ方言である (Language is a dialect with an army and navy.)」といった警句を持ち出すまでもなく、言語の地位は政治的な判断に委ねられることが多い。為政者は国家統治の手段として、分裂や独立につながりかねない他民族・多言語の権利は極力認めたがらない。

この日本にあっても、いまだに「単一民族・単一言語の国家」という言説を至るところで耳にする。しかし言語分類上、日本における言語の数は15を数える (Ethnologue : 同上)。⁷ この数は、上述の政治性にとらわれない集計によるものである。ちなみに、日本語の母語話者数は1億2千万人強であり、話者数でいえば世界9位の強大言語である。現在、そのような上位20言語の話者が世界人口の半数以上を占める一方で、(数千にのぼる) 半数以上の言語は、インド、ブラジル、メキシコ、インドネシア、パプアニューギニア、ナイジェリアなどの8カ国で、人知れず受け継がれる少数言語なのである。実は、21世紀末までに現存する世界の20~50%の言語が絶滅し、40~70%の言語は危機に瀕し、安泰なのはわずか5~

10%の言語(300~600)に過ぎないと推定されている(Krauss 1992)。

では語順についてはどうであろうか。言語の数と同様、語順についても不確定な要素が多い。なぜなら、日本語のように書き言葉を持ち文法書が書かれている言語はむしろ少数派であり、書き言葉も文法書もない少数言語が多数存在するからだ。さらに語用論的、修辭的操作を経ると、英語でさえも多様な語順を許容する(例えば、“THAT I don't know for sure.”)。従って以下で述べる語順とは、特別な操作を経ない平叙文における基本語順を指す。

世界に目を向けると、言語学者が現有資料を調査した限りでは、英語のようなSVO語順(主語(S) - 動詞(V) - 目的語(O))は決して多数派ではない。政治的・経済的な影響力の強い言語が欧米に多いこともあり、SVOという語順が優勢であると思いがちだが、実は日本語のようなSOV型が世界では優勢となっている(表1)。

恐らくここで、「なぜSとVとOだけなのか?」という疑問に答える必要があるだろう。(英語の文法にはC(補語)もある、という声が聞こえてきそうである。)。その理由は、世界の言語分布を体系的に調査したところ、さまざまな言語に共通する要素として少なくとも動詞と名詞は確認できたという観察による(Greenberg 1966)。外界の事態を描写する際に、いかなる言語においても「動作主」、「動作(・状態)」

そして「動作対象」は必須の要素であろう。これらを表すのは名詞と動詞である。(さらに、形容詞や副詞などは言語によっては認定が困難で、動詞のように扱うのが適当な言語もある。)したがって、S・O・Vはこういった多様な要素を代表しているのだ。そして類型論的な語順研究から、述部の語順(OV型またはVO型)が、他の品詞の配列を決定する要因であることがわかっている(Greenberg 1966)。



| 調査者(言語数) | 語順 | | | | | |
|---------------------------|---|------|------|---|-----|-----|
| | SOV | SVO | VSO | OSV | OVS | VOS |
| Greenberg (142) | 45.0 | 36.6 | 18.3 | --- | --- | --- |
| Ruhlen (427) | 51.5 | 35.6 | 10.5 | 0.2 | --- | 2.1 |
| Mallinson and Blake (100) | 41.0 | 35.0 | 9.0 | 1.0 | 1.0 | 2.0 |
| Hawkins (336) | 51.8 | 32.4 | 13.3 | --- | --- | 2.3 |
| Tomlin (402) | 44.8 | 41.8 | 9.2 | --- | 1.2 | 3.0 |
| SO/OS タイプ |  | | |  | | |

表1. 世界の言語における主要6パターンの語順の頻度(%)
(Siewierska 1999)

これら3要素の並べ替えの可能性は6通りあり、それぞれに該当する言語の存在が確認されている。世界の言語はこの6パターンに均等に分割されている訳ではないが、表1に見るとおり、基本的な序列(SOV > SVO > VSO (> VOS > OVS > OSV))は共通している。ただし別の見方として、

世界の語順のパターンは「 $3 \times 2 \times 1 = 6$ 」という並べ替えの可能性というよりも、「SO」または「OS」という名詞成分のどこに「V」が配置されるかにより異なると考えることもできる（表1下図）。そして表1から、「SO」タイプが圧倒的に多数であることが分かる。「S」が先に来る傾向が強いということは、文において主語にあたる「動作主」が「動作対象」にあたる目的語よりも先に言語化されやすい（つまり認知的に顕著なものが主語になりやすい）ということを示唆している。また、「SO」タイプでは「V」が後尾に来る形式が最も多く、逆の「OS」タイプでは「V」が冒頭に来る形式が多いことから、それぞれのタイプで最多の形式はSOV-VOSという鏡像パターンからなることがわかる（表1・上部矢印）。同様に、それぞれのタイプで2番目、3番目に多い語順も同様に鏡像をなす。つまり、世界の言語における語順の分布というのは、人間が外界で起こる事態を概念化する際の認知的な偏りを示している可能性がある。この事実は非常に示唆的であり、これが果たして文を構成する際の認知的な負荷や志向性を反映するのか、地域的・環境的要因（例えば平原や密林、寒帯か熱帯か）との相関があるのか、人種・民族（さらには宗教）などとの関連があるのか、といった多くの仮説を提起する。

ではなぜ言語の多様性を担保する必要があるのか？おもに3つの理由が挙げられている（渡辺2004、宮岡2002）。まず

言語学の目的の一つとして、できるだけ多くの言語資料を収録、記述して目録を作り、アーカイブ化して後世に残すことそのものに言語学的な意義がある。ことばに関する資料がなければ言語研究はできない。言語資料はその拠りどころであり、これは言語学という学問内部からの要請である。二つ目の理由は、話者そのもの関わる要因である。言語は、文化遺産として、あるいはそれを話す人々のアイデンティティの拠りどころとして、大きな役割を担う。各民族の文化の一部は、言語による分類や成り立ちの中に、そして言語作法や使用法の中に埋め込まれ、受け継がれている。その「乗り物」が消滅することは、文化やアイデンティティの継承が非常に困難となることを意味する。そして最後に、認知的な多様性の発露である多様な言語を保存することは、人類の外界への適応力を維持することにつながる。

最後の点についてはさらに説明が必要であろう。先ほど、語順という一つの言語現象が人間の外界認識の帰結ではないかと述べた。人はことばを通して世界とつながり、心がそこに表れる。しかし残念ながら、幾何級数的に言語が絶滅の危機に瀕したとしても、人類の生存にどう影響するのか身近な問題として感じられない。例えばアマゾン奥地の、話者が50人しかいない言葉が一つ消えて私たちの世界観や生活に影響するのと問われれば、答えは否である。しかし、その一方で「生物多様性」は喫緊の課題として喧しく論じられている。

確かに生物多様性は「生命」に関わるため、その議論は理解しやすい。ペニシリンのように、何の変哲もない青カビから抽出された薬剤が、いかに人類の生存に供したかを考えれば、どのような生命体にも無限の共益の可能性を見ることができ

る。

では言語についてはどのような議論が可能なのか。実は言語学者も、生物多様性と同様の議論を行う。生存という問題は、「強いものが生き残る」といった弱肉強食の論理ではなく、外界の環境にどれほど適応できるかという順応性の論理にもとづくと考えられている。順応性や適応力を担保するのは生物としての多様性である。言語相対性の議論を持ち出すまでもなく、言語は世界観、ひいては認知能力の発露であり、人間の認知能力の多様性を担保するのは言語の多様性である。例えば、世界中の人々が全て英語を話す世界になったとき、そこにどれほど多様な視点や発想が生まれてくるだろうか？ 未来において環境が激変した時に、より環境に適した外界認知を内包できる言語は他のタイプかもしれない。

荒唐無稽と一笑に付されるのを覚悟で例を述べよう。仮に数十年後に巨大彗星が地球と衝突して突如水河期になったとしよう。その時に、北極圏のイヌイット語（語順はSOV）が消滅していたらどうだろうか。例えば、いかなる言語も「証拠性 (evidentiality)」という特徴を言語に組み込んでいる（日本語なら、「～だろう」「～（だ）そうだ」「～らしい」「～み

たい」のように、伝達情報の源が自己の認識にあるのか、伝聞であるのか、視覚的な明示性であるのかなどを区別する要素である)。イヌイット語には広大な雪原で生活するための知恵として、ある事物が見えるか見えないかだけでなく、水平か上下か、囲まれているか否か、などの情報を接辞として加えることで、英語の“there”にあたる空間領域を5通りに分類するという (Denny 1982)。雪原で生きる知恵や認識が埋め込まれていない言語しか話せないとき、どれほどの苦労を強いられることだろう。こう考えると、言語の多様性を保持することが人類生存の鍵であるという主張は決して侮れないものとして響くはずである。言語の多様性を単なるロマンティシズムとして放置すれば、そのツケを払うのは我々である。

4 言語の多様性と英語の覇権

最後に、英語という単一言語に焦点を当て、現代におけるその変種と覇権がもたらす影響について考える。その現実、実は上述の警鐘と矛盾する方向に向かいつつある。それを示す手がかりとして、英語話者の数を同定することから始めたい。ただし、これはそれほど容易でないことがわかるだろう。そもそも言語の話者数はどうやって数えたらよいのか？日本語に関しては、それを母語とする国は（歴史上の一時期と移住を除けば）日本以外に存在しない。よって国勢調査結果が

ある程度正確な数字を示してくれそうである。しかし一方、英語は世界中に拡散し、英語圏の話者でなくとも、母語話者並みに英語を操る人々は多数存在する。なおかつ、アメリカ政府は連邦レベルで英語を「国語」と規定してもいないし、アメリカ国籍があるからといって英語が母語であるとは限らない。英語を取り巻く状況は明らかに日本語とは異なる。

それを理解する一つの方法として、Kachru (1985) の World Englishes (複数形であることに注意) の理念にもとづく Crystal ((2003) の分類を見てみよう。図4のように、英語圏は(1) Inner Circle、(2) Outer Circle、(3) Expanding Circle の3層に分類される (もちろん境界線が明瞭でない場合もある)。まず(1)には、イギリス、アメリカを中心に、英

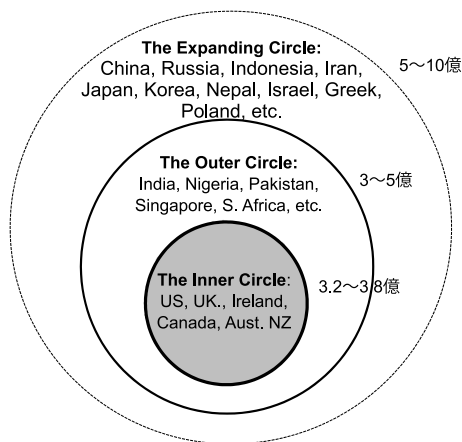


図4. 英語圏をなす3つの層 (Crystal 2003:107)

語を母語とし、かつてイギリスが宗主国であった国々（カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなど）が含まれる。(2)は主にイギリス、アメリカの旧植民地であった国々であり、現在でも英語が公用語として重要な地位を占めるという社会状況を有する（事実英語は、概算で80程度の国と地域で公用語、あるいはそれに準ずる重要な役割を果たしている）。そして(3)には、日本、中国、韓国、そしてヨーロッパ諸国のように、通商、経済、政治面で英語を重用する国々が含まれる。⁸

したがって、英語話者を「母語話者」という基準で測れば、その人口は4億人弱に過ぎない。ちなみに中国語は、相互に意思疎通が不可能な複数方言の総称であり、12億人程度の母語話者がいると考えられる。その中で北京語（Mandarin）の母語話者は9億人以上といわれており、これに限定しても母語話者としては英語よりも圧倒的に多い。しかし、英語話者を「英語を公用語とする国と地域（Outer Circle）の話者」までとすれば、北京語（Mandarin）母語話者と拮抗するという現状が見える。さらに、拡張中の層（Expanding Circle）まで含めると、最大概数で20億人ほど、つまり世界のほぼ3分の1の人々が広義の「英語話者」ということになる。そしてその数は年々増大している。

別の角度から世界の英語使用状況を概観したのが以下の図5である。カラー印刷でないため判然としないかもしれないが、おもに濃い部分が母語話者比率が高い地域である。日

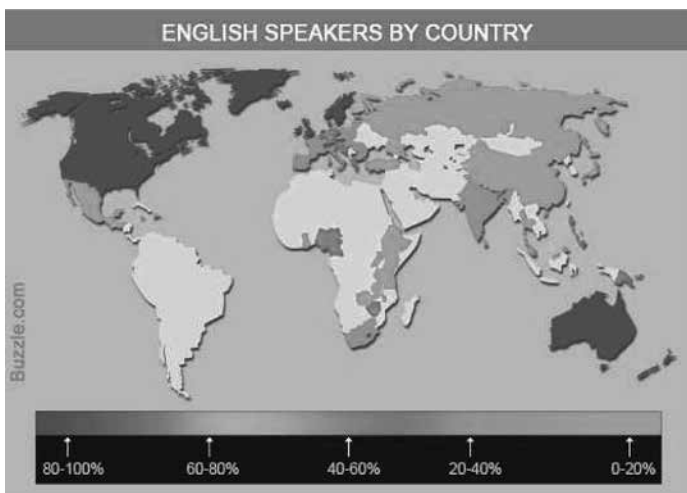


図 5. 国別の英語話者比率 (<http://polymathaftermath.blogspot.jp/2014/08/a-complete-list-of-english-speaking.html>)

本は0～20%に位置し、大方の印象を裏付けているといえよう。上述の通り、英語の母語話者が世界人口70億人のうちせいぜい4億人ということは、日本人が海外に行って英語を使う際には、ほぼ間違いなく我々のような非母語話者同士で用いる機会が多いことを意味する。日本で我々の身近にいる英語話者は英語を母語とする教師であることが多いため錯覚しがちだが、海外の英語使用状況は日本人の認識とかなり異っている。

英語教育における目標言語（つまり英語）の多様性は1960年代までほとんど認められておらず、その目標は母語話者に

近づくことであった。しかし欧米では、1980年代から高等教育を中心にそのような発想は薄れ始める。公民権運動を境にした少数民族や社会的弱者の権利保障への流れはもちろん、ポストモダン的な「大きな物語の終焉」に端を発する「標準的な英語（＝母語話者英語）への懐疑」が影響しているといえよう。特に1990年代以降、英語変種—つまり民族や文化に根ざした多様な英語—にも妥当性を認める方向に舵を切った。

世界の英語教育に目を向けると、もはやアメリカ英語やイギリス英語だけが絶対的な到達目標だと考える状況にはない。もちろん英米の標準的な、権威のある英語を使える技能は有形無形の利益を生むことは確かである。むしろ問題は、そこに過剰な価値を置くことで、地域の英語（ひいては地域の英語話者）やネイティブでない英語（およびその話者）に対して、偏見や差別を醸成してしまうことだ。日本における根強いネイティブ信仰はその裏返しといえよう。しかし一方、言語習得研究では、ある年齢を過ぎたら母語話者としての技能を獲得することが認知的・生理学的に困難になることがわかっている（これは「臨界期仮説」と呼ばれる）。つまり過剰な英語ネイティブ信仰は見果て夢であり、差別を助長し、対等なコミュニケーションの形成に逆行しかねないという危険をはらんでいる。

ある批評家は世界で英語が多様化する現状（そして未来）

を、オリンピック種目に採用された柔道を引き合いに出して説明している。⁹つまり柔道は、世界に拡散する過程で元来の「正統」という殻を破らねばならなかった。例えば、「柔よく剛を制す」ことを目指す武道でありながら、西欧的な体重別という制度を容認し、時間制限という制約を課されることになった。(日本柔道協会はこれらに強く反発したという。)しかし、こうしてスポーツとしての再定義を経なければ、柔道はいまだ極東の無名の武道のままであったことだろう。一方で、英語は規制のしようがないほど変種を生成しながら拡散が急速に先行した。その過程で、各々の地域で独自の英語が生活に組み込まれてしまった以上、正統性に関する元来の意識を改め、変質と多様化を甘受する覚悟が必要になるだろう。この意識がどれほど Inner Circle (特に英米)の一般話者に(もちろん英語学習者にも)浸透するかが今後の課題といえるだろう。

そこで近年提唱されたのが、*English as a Lingua Franca* (「共通語としての英語」)という理念である (Jenkins 2007)。上述の通り、世界における英語の実態は、ネイティブ (母語)話者の手を離れて、シンガポールのように公用語として英語を使う国から、日本のように公教育において主要な外国語に位置付ける国まで、その浸透度はさまざまである。特記すべきは、そのようなモデルの一つが英米の英語ではなく、特定の国に依拠しない「世界標準英語」(WSE)という英語

変種を到達目標としていることにある（図6: Svartvik and Leech 2006）。ピラミッドの最上階にはWSEという「抽象的な」変種が想定されている。つまりこれを母語として用いる者はおらず、国際コミュニケーションのために英語学ぶ際のターゲット変種と規定されている。海外に出れば、今や英語の母語話者でない人々と英語を話すことが主流となった今（世界人口70億人の中で、母語話者は4億人程度、一方英語を何らかの目的で用いる人は約20億人）、これは妥当な目標といえるであろう。（ただし、その実効性に疑問を投げかける人々も少なからずいる）。

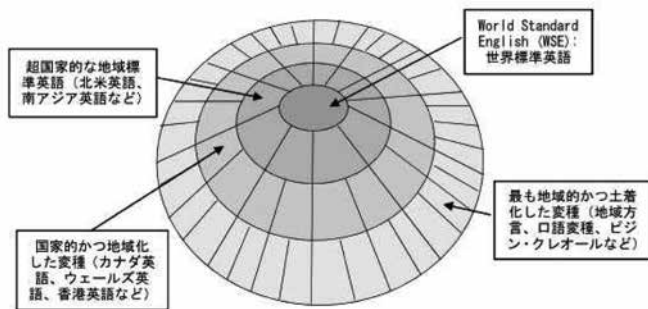


図6. Svartvik and Leech (2006) のモデル

英語の多様性を語るとき、そこには大きなジレンマが立ちあがる。非母語話者の英語の認知度と許容度を高めることは多くの移民や非母語話者にとっての光明ではある。それは非母語話者の社会的認知と進出を促進する一方で、そのよう

な形で英語が世界の至るところに浸透すれば、弱小言語はますます衰退するだろう。それはコインの両面として避けて通ることのできない現実である。この矛盾をどうにかたちで軟着陸させるのが、英語教育者と言語学者に託された大きな課題になろう。

例えば、現代の日本では（少なくとも表面的には）方言を好意的に捉える傾向が見られるのは好ましいことである（田中 2011：ただし田中1976も参照）。しかし公的・制度的場面における方言使用がいまだ憚られるのは、完全な社会的認知に至っていないことの証左でもある。しかし非標準英語や非母語話者英語はこの段階にすらない。英語における規範性が、進学、就職、昇進などの人生段階における「門番（Gatekeeper）」としての役割を果たす教育制度が、多くの国の社会システムに組み込まれている以上、標準英語の威信と非標準英語の汚辱は必然的な帰結である。社会システムの改革と同時に、意識改革のための行動をまずは教育現場から始める必要がある。

おわりに

本稿で見た言語の多様性と英語の拡散はせめぎ合いながら逆方向へのベクトルを発している。つまり英語変種の認知は非母語話者および英語学習者にとっては朗報でありながら、世界の言語にとっては存続と多様性への脅威となって

いる。ただしこの現状には二（多）面性がある。「言語の保存」という発想は、純粹で固有の文化・言語の存在を前提とした、（つまり明快なカテゴリー化に依拠する）構造主義時代の名残でもある。逆に、言語や文化の変容を前提とするならば、強大言語の拡散と侵入によって引き起こされる土着言語との融合は現代における必然の産物でもある。実際のところ、ICT やメディア・物流が発展した現代において、言語・文化の純粹性などは望むべくもない。かつての日本がそうであったように、積極的な西欧文化・技術の導入を経ても、基層が不変ならば異文化との融合は懸念すべき問題ではないという主張も理解できなくはない。

しかし、例えば Everett (2009) がフィールド調査を行ったアマゾン奥地の少数民族ピダハンと日本が決定的に異なるのは、日本語が当面絶滅の恐れのない安定した言語であるという点である。少数民族の言語に同じことが起これば、ひとたまりもなく絶滅に突き進むことになろう。その一方で、少数言語の話者が経済的安定や社会進出を求めて自発的に母語を捨て、強大言語に乗り換えていくのを責めることはできない。（そして日本国内の島嶼言語にも同様のことが起こりつつある。）現状を逆転することはできなくとも、多様性を称揚する意識を共有することから始めなければならない。

9.11以降保守的な言説が目立つアメリカを尻目に、イギリスを中心とするヨーロッパでは「超多様性 (superdiversity)」

という概念が広まりつつある (Vertvec 2007, Blommaert 2013)。そこで模索するのは、従来ある多様性の中にさらなる多様性が生まれ、政治、経済、移民問題、教育問題といった様々な要因がイギリスやヨーロッパ社会を分断しているという現状への対応策である。この運動を推進するのは、おもに民族学や人類学的アプローチで移民研究に取り組む研究者であるが、社会言語学や言語教育にもこのような思想は波及しつつある (Blommaert and Rampton 2013)。

それと同時に、多様性を社会分断の元凶ではなく、生存のための資源として受け入れる土壌も生まれ始めている。現時点ではいまだ積極的に移民を受け入れていない日本においても、早急に妥当な施策を考案しなければならない時期を迎えている。言語多様性は、その際の重要な、生存のための鍵を握る要因として、生物多様性と同様の覚悟を持って取り組むべき課題である。

注

- 1 本稿では多様性と普遍性という切り口から言語学の流れを概観する。ただしルーマニア生まれの言語学者コセリウは、言語学における関心が「理論と記述」と「比較と歴史」という二極間で一世紀ごとに揺れ動くことを指摘している (加賀野井 1995)。その伝によれば、ルネサンス、18世紀、20世紀は「理論と記述」の時代、17世紀、19世紀、そしておそらく21世紀は「比較と歴史」の時代となる。確かに、前世紀末からTraugottらの

比較歴史言語学的知見を用いた文法文化研究、Levinsonらの対照言語学的手法による言語相対性研究が勃興してきた点は注目に値する。

- 2 この命名は心理学者の J.B. Carroll によるものである。サピアもウォーフも、彼らの主張を実証されるべき「仮説」として提示したことはなく、あくまで言語に対する彼らの理解を吐露したものであった。
- 3 ただし言語と思考の関係には段階的、かつ流動的な因果関係が想定される。例えば、「言語が認識を決定するのか(強いバージョン=言語決定論)」、あるいは「言語が認識に影響を及ぼすのか(弱いバージョン=言語相対論)」という区別がなされるものの (Slobin 1973)、サピアやウォーフの主張は著作ごとに「揺れ」がある (Mannheim and Hill 1992)。
- 4 ポストモダン思想のまやかしを暴露し、「サイエンスウォーズ」と称される現象を引き起こしたのがソーカル事件と言われている。これは、物理学者アラン・ソーカルが、無意味な数式や術学的用語をちりばめた擬似哲学論文を作成し、「ソーシャル・テキスト」という専門誌に投稿したところ、その出鱈目な内容にもかかわらず、編集者はそれを見抜けずに、1996年に掲載されたという事件である。要するに、様々な領域の概念を融合することで新たな思想を生み出そうとしたポストモダンの発想が、数学や物理学の用語を理解しないまま遊戯に興じるように濫用していることを暴露した点で、ポストモダン思想への大きな打撃となった。
- 5 ただしアメリカ手話に音素がいくつあるかについては意見の一致を見えおらず、議論の余地が多分に残るとされる。例えば Stokoe (1960) は50程度、Liddell and Johnson (1989) は100以上を想定している。また “phoneme” の代わりに “primes” (「最小単位」) と呼ばれることもある。

- 6 英語や日本語ではこのような文法的な区別はないが、2人以上が同席する場合、いくつかの言語（例えば北オーストラリア周辺諸語や南インドのドラビタ語族など）では、アメリカ手話のように聞き手を含む「私たち」(inclusive we) と聞き手を含まない「私たち」(exclusive we) を異なる代名詞で区別する言語もある。
- 7 具体的には、日本語に加え、先住民言語と認められたアイヌ語、日本手話、歴史的な定住コミュニティの言語である韓国・朝鮮語、そして残りは主に沖縄周辺の島嶼言語（沖永良部島、喜界島、奄美大島、宮古島、など）である。
- 8 一見したところ、この区分は「母語」「第二言語」「外国語」としての英語に対応するようにも見える。しかし、第二言語 (ESL: English as a Second Language) とか外国語 (EFL: English as a Foreign Language) とラベリングすることは第一言語 (First Language) との対比を必然的に暗示し、対決姿勢や隷属意識を助長するという理由で、この対応関係に異を唱える向きもある (Kachru and Nelson 1996)。
- 9 これは日本における英語公用語論の推進者、船橋洋一氏が用いた比喻である。個人的には英語公用語論には賛成しかねる部分が多いが、この比喻が示唆する点は考察に値すると考える。

参考文献

- Blommaert, Jan (2013). *Ethnography, Superdiversity and Linguistic Landscapes*. Bristol: Multilingual Matters.
- Blommaert, Jan and Rampton, Ben. (2013) Language and superdiversity.

Diversities 13 (2): 1-21.

Chomsky, Noam (1965). *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge: MIT Press.

Crystal, David (2003). *The Cambridge Encyclopedia of The English Language* (2nd ed.). Cambridge Univ. Press.

Denny, Peter. 1982. Semantics of the Inuktitut (Eskimo) spatial deictics. *International Journal of American Linguistics* 48: 359-384.

Everett, Daniel L. (2009). *Don't Sleep, There are Snakes: Life and Language in the Amazonian Jungle*. Knopf Doubleday Publishing. (『ピダハンー「言語本能」を超える文化と世界観』(2012) 屋代通子 (翻訳) みすず書房)

Greenberg, Joseph H. (1966). *Universals of Language*. Cambridge: The MIT Press.

Jenkins, Jennifer. (2007). *English as a Lingua Franca: Attitude and Identity*. New York: Oxford University Press.

Kachru, Braj B. (1985). Standards, Codification and Sociolinguistic Realism: The English Language in the Outer Circle. In Randolph Quirk and Henry Widdowson (eds.), *English in the World: Teaching and Learning the Language and Literatures*, 11-30. Cambridge: Cambridge University Press.

Kachru, Braj B., and Cecil L. Nelson. (1996). World Englishes. In Sandra McKay and Nancy H. Hornberger (eds.), *Sociolinguistics and Language Teaching*, 71-102. Cambridge University Press.

Kramersch, Claire (1993). *Context and Culture in Language Teaching*. Oxford

University Press.

Krauss, Michael (1992). The world's languages in crisis. *Language* 68(1): 4-10.

Kulick, Don(1992). *Language Shift and Cultural Reproduction: Socialization, Self, and Syncretism in a Papua New Guinea Village*. New York: Cambridge Univ. Press.

Lakoff, George (1990). *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press.

Levinson, Stephen C. (2003). *Space in Language and Cognition: Explorations in Cognitive Diversity*. Cambridge: Cambridge University Press.

Liddell, Scott K. and Johnson, Robert E. (1989). American Sign Language: The phonological base. *Sign Language Studies*, 64: 195-277.

Lyotard, Jean-François (1979). *The Postmodern Condition: A Report on Knowledge*. (English translation by Geoffrey Bennington and Brian Massumi, 1984) University of Minnesota Press.

Mannheim, Bruce and Hill, Jane H. (1992). Language and world view. *Annual Review of Anthropology* 21: 381-406.

Marcus, George E. and Fischer, Michael F. (1986). *Anthropology as cultural critique: An experimental moment in the human sciences*. Chicago: University of Chicago Press.

Siewierska, Anna (1999). Word order and linearization. In K. Brown and J. Miller (Eds.), *Concise Encyclopedia of Grammtical Categories*, 412-418. Amsterdam: Elsevier.

Slobin, Dan (1971). *Psycholinguistics*. Glenview, IL: Scott, Foresman, and Company.

Stokoe, William C. (1960). *Sign Language Structure: An Outline of the Visual Communication System of the American Deaf* (*Studies in Linguistics: Occasional Papers 8*). Silver Spring, MD: Linstok Press. Revised 1978.

Svartvik, Jan and Leech, Geoffrey (2006). *English: One Tongue, Many Voices*. NY: Palgrave MacMillan.

Vertovec, Steven 2007. Super-diversity and its implications. *Ethnic and Racial Studies* 30 (6): 1024-1054.

加賀野井秀一 (1995) .『20世紀言語学入門—現代思想の原点』講談社 .

宮岡伯人 (2002) .「消滅の危機に瀕した言語—崩れゆく言語と文化のエコシステム」宮岡伯人・崎山理 (編)『消滅の危機に瀕した世界の言語』, 8-53. 明石書店 .

田中ゆかり (2011)『「方言コスプレ」の時代—ニセ関西弁から龍馬語まで—』岩波書店.

田中克彦 (1976)「恥の日本語」『展望』(213): 41-56.

渡部昇一 (1973) .『言語と民族の起源について』大修館.

渡辺己 (2004) .「北アメリカ北西海岸先住民にみる言語とアイデンティティ」小野原信善・大原始子 (編)『ことばとアイデンティティ：言葉の選択と使用を通して見る現代人の自分探し』, 127-149. 三友社.

ウェブサイト：

A Complete List of English-speaking Countries: <http://>

polymathaftermath.blogspot.jp/2014/08/a-complete-list-of-english-speaking.html. (2015年11月10日検索)

ASL University :

<http://www.lifeprint.com/index.htm>. (2015年10月27日検索)

Ethnologue :

<http://www.ethnologue.com/home.asp>. (2015年10月25日検索)